

ヒラメ放流技術開発事業（抄録）

由木雄一・田中伸和・森脇晋平

本調査は栽培漁業技術開発事業の一環として、人工放流ヒラメの放流効果を究明しようとするもので、昭和58年度から継続して調査を行っている。主として、栽培漁業センターで種苗生産、中間育成、水産試験場が放流後の追跡調査を分担し協力して作業を進めてきた。今年度は種苗生産、中間育成、種苗放流、追跡、漁業実態等の調査を実施した。

詳細は「昭和62年度放流技術開発事業報告書（日本海ブロック・ヒラメ班）」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

天然ヒラメ稚魚分布生態調査

(1) 6月11日～7月14日の間に5回のソリネットの調査を行い（のべ72回の操業）、天然ヒラメ稚魚526尾を採集した。分布はこれまでの調査とほぼ同様な傾向を示し、水深5mを中心に高密度域が形成されていた。出現量は昨年約1/3程度と推定された。

(2) 天然ヒラメ稚魚の最小個体は全長11mm、最大個体が130mm、モード60mmであった。一般的に水深が浅い所ほど生息しているヒラメの稚魚は大型になる傾向がみられた。

(3) ヒラメ稚魚の餌料として、アミ類、端脚類、魚類、多毛類、貝類等が確認されたが、アミ類が最も多く捕食されており、天然ヒラメが約80%、放流ヒラメが約60%を占めていた。

(4) アミ類は7種が確認されたが *Achanthomysis nakazatoi* と *Achanthomysis pseudomitsukurii* の2種が特に多かった。

人工0才魚の追跡調査

(1) 全長21～111mmの人工0才魚205,000尾を大社湾（神戸川河口、水深5m）に放流した。放流後、周辺海域をソリネットで調査し、放流2日～20日後に計75尾の放流ヒラメを再捕した。全長30mmサイズの放流2日後の初期生残率は約40%と推定された。

(2) 放流2日後に再捕されたヒラメの約80%のものがすでに天然の餌料を捕食していた。

昭和58～61年度放流群の追跡調査

(1) 標識ヒラメの再捕率は人工0才魚が0～0.32%、人工1才魚が1.2%、天然未成魚が3.8～8.9%となっており、特に0才魚での標識の意義、あるいは標識のとりつけ方法には問題がある。

(2) 小型底曳網のヒラメ漁獲物に占める体色異常魚の割合は0.61%となっていた(昭和61年9月～昭和62年5月)。確認された体色異常魚の全長は25～59cmの範囲にあり、その大半が1～3才の未成魚となっている。漁業者の体色異常魚の発見率(報告率)は48.8%であった。

漁業実態調査

(1) 昭和50～60年間の島根県におけるヒラメの総漁獲量は186～357トンの範囲で推移しており、やや増加傾向にある。漁獲の主体は小型底曳網、沖合底曳網であるが、近年、小型底曳網の割合は増加しており、昭和60年には全体の約60%を占めている。

(2) 小型底曳網で漁獲されるヒラメは若魚、未成魚、成魚(全長25～95cm)が混獲されているが、漁獲の主体は3才未満の未成魚で、全漁獲尾数の約88%を占めている。

(3) 和江漁協の小型底曳網地元船18隻のヒラメの漁獲量は2.6トン/月、1隻当たり平均出漁日数は13.5日/月、1日1隻当たりのヒラメの漁獲量は11.1kgとなっている。

(4) 石見海区における小型底曳網の漁場は120～160m深で、和江船は120～135mを主漁場としている。各漁協とも比較的限られた漁場で操業しており、漁場の競合はあまりみられない。